

実践報告

解釈の交流による読みの変容に関する考察

— 3年国語科「『故郷』が長年教科書に掲載されているのはなぜ?」の授業分析を通して—

吉岡 浩一* ・ 羽田 潤**

Considerations on the Improvements of Students' Reading
through Exchange of Interpretation
— an Analysis of the Third Year Japanese Language Class
"Why has Kokyo been Published in Textbooks for Many Years?" —

Koichi YOSHIOKA* and Jun HADA**

【要約】

小説学習の醍醐味は、含意性のある言葉に気づき、その解釈をすることにある。解釈とは本来個人的なものであるが、その信頼性・客観性を高めるために、他者と解釈を交流させる場を設けた。解釈の交流を通して、生徒が重要だと考えたキーワードは、しだいに人物描写から象徴表現へと変わっていくとともに、キーワードを作品全体と関連させてより複数の観点から解釈できるようになった。結果として、作品の主題について考えることにつながった。

【キーワード】

描写, 象徴, 解釈, 交流

1 はじめに

言語活動の充実や指導過程の明確化、指導の系統性を改訂の重点とした国語科新学習指導要領が、来年度から全面実施される。3領域1事項の枠組みは維持されたが、前述の通り、指導過程を意識した単元づくりが求められている。その中で、「読むこと」領域においても、言葉の意味や内容を理解することに終始せず、テキストの表現の仕方や内容について、自分の考えを形成することが重要視されてきた。特に、これまでテキストの内容の評価に偏りがちだった点を改め、表現の仕方を評価することに注目が集まっている。

小説を学習する魅力のひとつに、含意性のある言葉に気づき、解釈することが挙げられる。優れた作品であればあるほど、読み返すたびに、含意性のある言葉や表現に気づかされるものである。ここでいう解釈とは、表現された語句や文章（特に描写や象徴など）の裏に込められた意味を明らかにしながら小説を理解する活動のことを指す。その際重要なことは、単に字義的な意味を捉えるだけでなく、作品中の他の箇所と関連させながら、作者の意図などを分析、推論することにある。その分析や推論が作品全体にどれだけ及んでいるかによって、作品に対する読みの深淺が決まってくると言えるだろう。

*佐賀大学文化教育学部附属中学校

**佐賀大学文化教育学部

本研究は、作品の読みが、グループや学級全体での解釈の交流を通して、どのような変容を遂げるのかを検証するのが目的である。本来解釈とは、自分自身の体験に裏打ちされた行為であり、同一表現であっても読み手によって受け止め方が異なってくるものだが、個人内の解釈に止めてしまえば、独りよがりなものに陥ってしまう可能性がある。そこで、授業過程に対話を取り入れ、解釈を他者と交流させることで、より信頼性・客観性のある解釈を目指す。そのことが、作品自体を読み深めることにもつながると考える。

2 単元の概要

単元を作るにあたっては、昭和40年代から現在に至るまでの教科書の目次を見比べさせ、その中で『故郷』が40年以上も教科書に掲載されていることに気づかせ、「『故郷』が長年教科書に掲載されているのはなぜ？」という単元を貫く問いを設定した。これは、「現実的・学問的な問い」を設定し、教室に閉じない「学び」を作りだそうとする本校研究主題を意識してのことである。また、教科書に掲載されている作品を絶対視することなく、客観的に作品と向き合う態度を養うことも視野に入れている。最終的には、作品の良し悪しを論じる批評ができることを目指す。

単元の授業過程は以下に示す通りである。

全9時間

- 1 『故郷』を通読し、初発の感想を書く。(1時間)
- 2 初発の感想を交流し、学習の見通しを持つ。(1時間)
- 3 登場人物の人物設定・人物像を捉えるために、人間関係図を書く。(2時間)
 - 3・1 個人およびグループで人物関係図を書く。
 - 3・2 各グループの人物関係図を比較・分析し、人物設定・人物像をつかむ。
- 4 『故郷』をより深く読むためのキーワードを考える。(3時間)
 - 4・1 作者の意図が感じられる言葉を各自で解釈し、その中から3つのキーワードを選ぶ。・・・Ⅰ
 - 4・2 上記のキーワードについてグループで解釈し、学級全体で交流する。・・・Ⅱ
 - 4・3 出されたキーワードについて、再解釈をする。・・・Ⅲ
- 5 「『故郷』が長年教科書に掲載されているのはなぜ？」に対する答えを、各自600字程度でまとめる。(1時間)
- 6 各自のまとめを交流し、学習の振り返りをする。(1時間)

単元の中程に、『故郷』をより深く読むための3つキーワードを考えるという学習課題を設け、描写や象徴を意識しながら、3回の解釈を行わせた。具体的には、Ⅰ個人での解釈、Ⅱグループでの解釈、Ⅲ個人での再解釈、である。解釈をする場を3回設定したのは、前述の通り、他者との交流を通して、読みがどのように変容したかを可視化するためである。

3 授業の実際

3-1 個人によるキーワードの解釈…(Ⅰ：1回目)

人物関係図の作成・分析を通して人物設定や人物像を捉えた後、作者が何かしらの意味を込めて用いたと思われる表現や深い意味が感じられる表現を作品中から取り出させ、各自で解釈をさせた。本校の生徒は、1・2年次の小説学習において既に描写や暗示の効果について学んでいたため、長編の小説とはいえ、比較的素早く解釈ができた。その後、『故郷』をより深く読むために作品中から3つのキーワードを取りあげるよう指示をした。生徒が挙げたキーワードは次の通り。()はその言葉を選んだ人数。

金色の丸い月(1 2) チャー(5) 紺碧の空(5) すいか(4) 四角な空(4) 銀の首輪(4) 地上の道(4) 厚い壁(4) 船(3) コンパス(3) 美しい故郷(3) 手製の偶像(3) 故郷(2) 薄墨色(2) だんな様(2) 石像(2) 大きな黒い目(2) 枯れ草の破れ茎(2) 空(1) 正月(1) 冷たい風(1) 月(1) 距離(1) 空模様(1) 希望(1) 小英雄(1) 緑の大地(1) 緑の山々(1) 前進(1) がらくた(1) 紙包み(1) 船の底に水のぶつかる音(1) 高い壁(1) 高い塀(1) 犬じらし(1) ホンル(1) 松の幹のような手(1) 値(1) ルントー(1) 鉛色の空(1) つやのいい丸顔(1) 五色の貝殻(1) 知事(1) 私の遊び仲間(1) かき消された言葉(1) 二千里の果て(1) 潮風(1) 似もつかない(1) 隔絶(1) 豆腐屋小町(1) ほお骨(1) 唇の薄い(1) 赤くはれている(1) 横たわる(1)

一人3つずつのキーワードを挙げることにしていたためか、生徒達の判断も多岐にわたり、本学級で延べ54個のキーワードが出された。その中でも「金色の丸い月」は学級の30%にあたる12名の生徒がキーワードとして取り上げた。その主な理由として、

- ・「紺碧の空」とセットで2回出てきます。希望を表しているの、ホンルとシュイシヨンの謎にも近いと思うからです。
 - ・この言葉は奇麗な夜空をイメージさせます。楽しかった昔と、何もかも変わってしまった今を対比させていると思い、重要なキーワードになると考えました。
 - ・最初に出てくる方と後から出てくる方で解釈が違って来るから。どちらともルントーのことを表している。
 - ・故郷に帰る時はなかった金色の丸い月が、故郷を離れる時には出ていた。この金色の丸い月は、ルントーと初めて会った時に出ていたので、希望が出たことを表している。
- などを挙げており、同じ言葉が作品中に2回出てきていることに加え、この言葉が出てくる場面と関連付けて解釈できている生徒が多かった。

3-2 グループによるキーワードの解釈…(Ⅱ：2回目)

次に、4人グループで解釈を交流し、各グループでキーワードを3つに絞らせた。解釈の交流を通して、個人では気づかなかった含意性のある言葉を発見させるとともに、キーワードを3つに限定することで、全体との関わりがより深い言葉を考えさせることをねらった。この話し合いの後に生徒が挙げたキーワードは以下ようになった。

金色の丸い月(1 6) すいか(7) 船(7) 地上の道(7) 空(6) 紺碧の空(5) 四角な空(4) 銀の首輪(4) 故郷(4) コンパス(4) 薄墨色(4) だんな様(4) 空模様(4) 希望(4) 正月(3) 石像(3) 冷たい風(2) 小英雄(1) よい値(1)

キーワードの数は19個。1回目に比べると、その総数は約3分の1にまで減った。グループでキーワードを絞ることが条件だったため、数が減ったのは当然の結果といえる。

グループでの話し合い後も、「金色の丸い月」が最も高い評価を受けた。そこで、この言葉が話し合いの中でどのように価値づけられていったのかを、「金色の丸い月」を選んだグループとそうでないグループの対話をもとに検証してみる。

3-2-1 A班における解釈の交流

このグループの4人はどちらかというと言語が苦手な、自分の考えに自身が持てず、全体の場で自分の考えを発表することがほとんどない。自分の言葉でまとめたり、書いたりすることに少々抵抗感を抱いているグループである。

この4人がIの段階で選んでいたキーワードは、

I男：「四角な空」「ほお骨」「唇の薄い」

F男：「金色の丸い月」「四角な空」「薄墨色」

N子：「金色の丸い月」「四角な空」「赤く腫れている」

H子：「高い塀」「豆腐屋小町」「隔絶」

であり、4人中2人が「金色の丸い月」をキーワードに挙げていた。

H子：「金色の丸い月」はどうする？

I男：うん

F男：これは何か、ルントーが…、明るく見えたみたいなの？

I男：そんな輝いてた時代？

N子：でもさ、これってさ…。

H子：思い出が？

I男：ルントーの黄金の時代…。

F男：だから何か、暗い過去の中でルントーとの思い出だけが…、みたいなの。

I男：あーね。

H子：昔の…、昔のルントー…。

F男：そうそうそう。

I男：輝いていたみたいなの。

N子：何か…どこだったっけ。ここらへんに何か書いてあるやん！

H子：「金色」って一番最後に書いてない？

N子：「金色」なんだけど…、故郷に帰った時はこの月が出てなくて、なんか…書いてないんだよ。

F男：えっ、回想シーンになんか書いてあるやん。

N子：そうそう。そこは何か…ルントーと出会った時には丸い月が見えてて、最後の…、故郷を離れる時も丸い月が見えてたのかな…。

H子：最終的に？

N子：そう。だから、ルントーと会った時っていうか…、最後あたりも明るい気持ちになったのかな…。

I男：じゃあ、この後どう絞る？

F男：えっ、だから、「四角な空」が暗い過去で…。

N子：これが暗い過去？

F男：で、「金色の丸い月」が明るい話でしょ。

H子：仲良かったっていうか…なんか…。

N子：じゃあ、ルントーと出会った時も…希望があったみたいなの…。

H子：昔が「四角な空」で、今が「隔絶」「薄墨色」…。

N子：（「金色の丸い月」を指差しながら）えっ？でも昔これだったよ。
 （しばらく間があって）
 F男・N子：昔「金色の丸い月」、今「隔絶」「薄墨色」、未来「金色の丸い月」！
 H子：あっ！そうそう。
 I男：かっこいい。なんかバック・トゥー・ザ・フューチャーみたいな…。

I男：じゃあ、どうする？
 N子：「金色の丸い月」と「隔絶」。必要だと思う。
 H子：うん。
 I男：じゃ、それプラス「四角な空」でよくない？
 H子・N子：うん。いいよ。
 F男：だけど…、「隔絶」と「薄墨色」どっちでいくの？
 H子：「隔絶」でよくない。
 I男：やるなら色と色でしょ。
 N子：「金色の丸い月」と「薄墨色」？
 I男：分かりやすいっていうか…。
 F男：色の対比。
 I男：すっきりするじゃん、そっちの方が。

このグループは最終的に「金色の丸い月」「薄墨色」「四角な空」の3つをキーワードとした。このグループでは、「金色の丸い月」がルントーとの楽しい思い出の場面に出てくることを手がかりに、離郷の場面も主人公が明るい気持ちになっていたと推測し、希望という意味づけを行っていることが見て取れる。また、作品のキーワードを、過去・現在・未来と時系列でまとめ、「金色の丸い月」を未来に繋がるキーワードとして解釈しているのは興味深い。

3-2-2 B班における解釈の交流

このグループは、比較的国語が得意で、事前アンケートでも「小説の学習が好き」と回答した4人で構成されている。小説の面白みを、想像力をはたらかせて読むことや、描写に込められた作者の意図を考えることにあると考えており、日頃からそのような意識で作品を読もうとする。特にK子は、自主学习ノートに、好きなアーティストの歌詞を視写し、自分で解釈をするほどである。

この4人がIの段階で選んでいたキーワードは、

T男：「二千里の果て」「金色の丸い月」「だんな様」

N男：「チャー」「潮風」「大きな黒い目」

K子：「故郷」「厚い壁」「希望」

H子：「距離」「厚い壁」「似もつかない」

である。

T男：僕が選んだキーワードは、1個目が「二千里の果て」ってやつで、ストーリーが始まる時にこの言葉が出てきて、ルントーや故郷と自分との距離ができたことが、この言葉で分かると思ったからです。2個目のキーワードが、「金色の丸い月」ってやつで、全体で2回出てきて、昔のルントーと私の関係が2回目の「金色の丸い月」の登場で、ホンルとルントーに引き継がれているっていうのが描写されていると思いました。3つ目のキーワードが「だんな様」で、これはストーリーの中で大きな役割を果たしていて、この言葉で、現在のルントーと私との身分の差がはっきりとするからです。

N男：えっと、「チャー」。ルントーを襲う数々の困難を比喻したものだと思います。あの、隙を見ては、まあ、すいか…、役人だったら税をとってすばしこく逃げ去るところから、ちょっと喩えてるんじゃないかなと思います。「潮風」が2つ目のキーワードで、常に一日中耕作をするルントーの重い税や凶作の困難を表しているし、この「潮風」はルントーが昔とはかけ離れた容姿になったことを表していると思います。3つ目が「大きな黒い目」で、ホンルの目が黒い、最後黒かったんで、その時は暗いとか悪いイメージをホンル自身が浮かべている、また同時にホンルの未来が主人公の迅と同じようにならないかという主人公（迅）の不安も表してるかと思います。

H子：1つ目のキーワードは、「厚い壁」で、悲しむべきことが二人の間にできてしまっていて、身分が少し違うだけで二人の間に壁ができていたみたいな感じで…。2つ目が、「距離」で、子供の時は心が通じ合っていたけれど、ちょっと違うだけで主人公とルントーがかけ離れていくことが予想されます。たぶん、えっと、3つ目のキーワードが、「似もつかない」で、自分が子供の頃に見たルントーではなく、変わり果てていて、本当にそうなのかと自分でも分からないように見入ってしまう感じの様子…。

K子：えっと、私は1個目のキーワードは、「故郷」で、最初帰ってくる時に「まるでこんな風ではなかった」って言うけど、でも実際はそうじゃなくて、進歩も寂寥もないとか、帰るときに名残惜しい気はしないとか、故郷を離れることに悲しさを感じないほど、変わっちゃったんだなっていう…。2つ目は「厚い壁」で、私とルントーが感じてしまった距離間を「壁」っていう言葉で表現して、「厚い」っていうのがほんと、遠い存在になってしまったっていう…。3つ目が「希望」で、私はホンルとシュイションに、自分たちのように身分が違うから遠い存在っていうふうになってほしくないって思ってるんだけど、それは「手製の偶像？」そう、ただの理想なんじゃないかって考えてる…。

N男：あっ、そう。そういうことだったのか！で、何が「手製の偶像」？

K子：何か「偶像」って辞書で調べたら、神とか仏にかたどった銅像みたいなってあったから、理想みたいな感じかな

N男：あー。「手製の偶像」。あー。

K子：なんかその後に、「地上の道のようなもの」とか「歩く人が多くなれば道になる」みたいなこと書いてたから、たくさんの人が希望を持ってがんばってれば、進む方向がしっかりするみたいな…、だから私の思う希望も叶うのかな…。

N男：これ難しいね。

K子：難しいね。最後急になんか難しくなったよね。

N男：そうそう、願っている。

N男：そう、急にさ、独り言で語り出してさ。

K子：んで、願っているみたいなの。

T男：どうする？同じのないよね。

K子：ないない。で、3つに絞るんでしょ。

T男：じゃあ、ルントーと私の関係っていうか差っていうか、身分の差みたいなのところを
まずまとめよう。

K子・H子：「距離」, 「壁」…。

T男：ない？

N男：ないですね。

(しばらく間があって)

T男：あっ、ホンルとルントーとか…。

N男・K子：あっー。

T男：私と、私と、私と…。

K子：私とホンルとか。

N男：「大きな黒い目」は若干関わりが…。ホンルとシュイションがちょっとまた主人公
とおんなじようになるのではないかっていう不安が。

K子：あっじゃあ、それ、「希望」もかな。

N男：で「チャー」「潮風」が、なんだっけ、ルントーがいじめられた比喻。

K子：ルントーのこと…。これは私の心境みたいなの。

T男：あーね。

K子：「故郷」は私の心境みたいなの。

T男：あーね。

H子：今と昔の、なんか差みたいなの…。じゃあ、この中から3つ？

K子：じゃあ、インパクトのあったものを3つ…。

N男：「希望」、これけっこうインパクトあったぜ。

K子：ありがとうございます。

T男：他は？他。

K子：うーんなんかね。うちこれもね、書いてるんだよね。「金色の丸い月」って。わか
りやす…、でも他のところも出すか。たぶん。

T男：他のところが出さないないようなところ。

K子：そうそうそう。かぶりをゼロめざして。「潮風」とかも分かりやすいと思う。

K子：「壁」とか「距離」とかも言いやすいとは思っている。

N男：うん。「距離」って言うくらいだったら「厚い壁」の方がいい。

K子：「厚い壁」の方がいい。じゃあ、こっち。

H子：「希望」「厚い壁」「故郷」、この3つ？

K子：ですかね。

N男：「厚い壁」と「故郷」の違いって何？

T男：「故郷」ってどういう意味？

K子：「故郷」は、私が、故郷を、こう愛着がなくなっちゃったっていうぐらい、子ども頃といろいろ変わったみたい。でも、それが『故郷』に繋がらないんだよねあ。

N男：そしたら、「故郷」は若干「厚い壁」に繋がらない？

K子：あーでも…。

T男：イコールでたぶん結べちゃうよ。

K子：自分的には、これにルントーは全く関わってない設定でいたいんだよね。

N男：あー、自分と故郷みたいな。

K子：そうそうそう。

(しばらく間があって)

T男：「だんな様」って入れていい？

N男：いれればいいやん。

K子：「希望」と…。

T男：あと1個何にしよう。

H子：あと1個何だっけ？

K子：「だんな様」にしたんじゃない。

H子：「だんな様」と「希望」と。あと1個なんにしようか？

N男：えっ、「故郷」じゃないの？

T男：「故郷」でいく？

K子：「故郷」にする…

このグループは最終的に、「希望」「だんな様」「故郷」の3つに絞った。一つ一つの言葉に込められた意味を丁寧に吟味している様子が、冒頭の4人の発言から伺える。

「金色の丸い月」については、T男が、作品中に2回出てきて、私とルントーの関係がホンルとルントーに引き継がれていくと指摘した。しかし、実際にはホンルとシュイションの関係に引き継がれると解釈するべきであろう。T男の誤読もあってか、この言葉はグループのメンバーには受け入れられなかったようだ。また、T男自身は「だんな様」という言葉へのこだわりが強く、話し合いの終末になっていきなりこの言葉をグループのキーワードとして取り入れることを表明している。そのことについて、グループ内で何も協議がなかったことは残念である。さらにK子は、「金色の丸い月」は分かりやすくてどこのグループでも指摘しそうだ敬遠気味な発言をしている。普段から言葉にこだわって作品を読もうとするK子にとって、他のグループが気づかないようなキーワードを選び出したいという意識がはたらいたと考えられる。その証拠に、誰もが見落としてしまいがちな『故郷』という作品のタイトルをキーワードとして挙げた生徒は、K子を含め学級で二人だけだった。

3-3 個人によるキーワードの再解釈… (Ⅲ：3回目)

グループでの話し合いの後、各グループで選んだ3つのキーワードを発表させ、解釈の交流を行った。そして、再度個人で、『故郷』をより深く読むための3つのキーワードを考えさせた。本学級の生徒が最終的に選んだキーワードを以下に示す。

金色の丸い月(24) すいか(24) 空(8) 四角な空(7) 船(6)
 銀の首輪(4) チャー(4) 紺碧の空(3) 正月(3) 地上の道(2)
 故郷(2) だんな様(1) コンパス(1) 薄墨色(1) 石像(1) 月(1)
 冷たい風(1) 距離(1)

挙げられたキーワードは18個。数自体はⅡの段階の19個とほとんど差は見られなかった。「金色の丸い月」は3回目も多く多くの生徒が取り上げる結果となった。また、「すいか」「空」「四角な空」「チャー」もその数を増やした。これら5つの言葉に絞ってその推移を見てみると、

	I：1回目	Ⅱ：2回目	Ⅲ：3回目
金色の丸い月	12	16	24
すいか	4	7	24
空	1	6	8
四角な空	4	4	7
チャー	5	0	4

上の表のようになる。一貫して「金色の丸い月」に対する評価が高かったのは、これまでの話し合いの内容からすると頷けるが、「すいか」に対する評価が急激に伸びていること、一度は評価を下げた「チャー」が再評価されていることは大変興味深い。

「すいか」や「チャー」が注目を集めたのには実は訳がある。Ⅱの後での学級全体における解釈の交流の際に、2班と4班がこの言葉をキーワードに取り上げたことに端を発している。特に4班は、「すいか」は主人公にとっては果物屋に売ってあるもの、ルントーにとってはチャーから守り抜き育てるものであることから、二人の価値観の違いを意味づけており、ひいては30年後の二人の隔絶を暗示しているという解釈を披露した。

この発言に触発されて、話題は徐々に、この小説における「チャー」の役割は何だろうという方向になっていった。このあたりからしだいに生徒の顔つきが変わってきて、「チャー」を見逃していた生徒や、Ⅱの段階でこの言葉への評価を下げていた生徒がざわつき始めた。そこですかさずN男を指名し、考えを聞いてみることにした。N男が「チャー」に着目し、鋭い解釈をしていたことを把握していたからである。N男は自身の解釈(162ページ参照)を学級全体に発表し、みんなから称賛を浴びた。本学級では、「チャー」は、少年期にあってはルントーから「すいか」を盗んでいくもの、成人してからはルントーから税や農作物を奪っていく役人や匪賊を象徴したもので、として捉えられることになった。

さらに加えて、2班からは、「すいか」には黒と緑の決して混じることのない2色の色があり、それが主人公とルントーとの対比に繋がるという解釈が出された。対比については、この小説の人物設定の学習において既に指摘していたのだが、すいかの色どりからこの言葉が出てくるとは予想もしていなかった。そこからすいかの形に触れ、すいかの形と対比されている表現を探させた。生

徒はいとも簡単に「四角」という言葉に気づき、『故郷』には「四角」と「丸」の対比も隠されていることを発見した。それによって「すいか」に対する解釈も

- ・主人公は「すいか」を買うものだと思っていて、ルントーは育てるものだと思っていた。これは主人公とルントーの身分の差からなる価値観の差を象徴している。何気なく読み過ぎていたのでハッとした。
- ・主人公とルントーの価値観の違いがよく表れている。私は「すいか」が象徴であることに気がつかなかったが、他の人の意見を聞いてなるほどと思った。30年後の二人の間にできた壁を暗示している。また、「すいか」が丸いというところが、「金色の丸い月」や「つやのいい丸顔」などに関連しているかも・・・と興味が湧いたから。
- ・幼いときからはっきりしていた価値観の違いが、2人の未来を暗示しているのだという考えに納得できたから。私たちの班も選んでいたけれど感じ方が違ってハッとさせられた。また、10班の「すいか畑の～ぼんやりしてしまった」といのは確かに2人の距離を表していそうで納得できた。
- ・4班の意見から、ルントーと主人公の価値観の違いから未来の格差を暗示しているという点と、回想の部分の1回目には「すいか」が出てきて、故郷と別れた後の部分では出てこないという、故郷への気持ちの変化が表れている点がいいと思ったから。

のように、作品の他の箇所との関連をふまえたものになっていった。このことが、Ⅲの段階における「すいか」や「チャー」への再評価につながったと考えられる。

4 読みの変容についての考察

今回の授業では、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの3回にわたってキーワードを解釈する場面を設定したが、その都度、作品の読みに変容が見られた。

特徴として、Ⅰの段階では、「金色の丸い月」をはじめ「紺碧の空」「すいか」「銀の首輪」など、作品中に複数回出てくる言葉をキーワードとして捉える傾向があったものの、その範囲は象徴表現や情景描写、人物描写など多岐にわたっていたが、Ⅱの段階では、「大きな黒い目」「松の幹のような手」「つやのいい丸顔」といった人物を描写した言葉は影を潜め、何かしら目に見えるもの、すなわち象徴的な物に意味が込められていると考える生徒が増えた点にある。これは、生徒のキーワードの捉え方が、人物描写よりも象徴表現に傾いていったことを表している。人物描写は、あるひとつの場面においてはその効果が発揮されるが、「作品をより深く読む」とした場合には、その効果が及ぶ射程がやや短いということだろう。

また、個別のグループ対話に目を向けると、4人での解釈の交流が、読みの変容に大きな影響を与えていることが分かる。9班の例で言うと、「金色の丸い月」をキーワードとするにあたって、過去・現在・未来という時系列の観点を導き出しただけでなく、Ⅰ男の「やるなら色と色でしょ。」やF男の「色の対比」という発言によって対比という観点が加わることで、「金色の丸い月」の解釈に深まりを持たせている。また、8班では、K子の解釈に対して、「あっ、そう。そういうことだったのか！」と新たな発見をしているN男の姿は印象的であった。その反面、鋭い解釈を述べるK子の考えにグループ全体が偏っていくという影響も見られた。

単元全体では、学級全体における交流が、Ⅲの段階での再解釈に最も影響を与えた結果となった。例えば、「すいか」を発端に「チャー」の解釈が深まったこと、対比という観点から「四角な空」「金色の丸い月」の解釈が深まったことはその最たるものであろう。現に、グループでの話し合いの段階

では取り上げなかった「チャー」を、N男は最終的にキーワードとして選んでいる。また、「四角な空」や「金色の丸い月」に関して、

- ・主人公の心や知識の象徴だということ、新たにルントーとの対比でもあると気づかされたので深いと思ったから。ルントーの「つやのいい丸顔」との対比になっている。また、「丸い月」ともある意味対比であるとわかった。
- ・四角な空は四角で、ルントーの丸顔、月の形、すいかは丸で対比していると分かった。四角な時は悲しい時、丸は幸せな時に出てきていると分かった。
- ・故郷に帰る時は「金色の丸い月」が出ていなくて、ルントーと会った時には出ていて、故郷を離れる時もある。だから、月は幸せ、希望の象徴だと思う。過去・現在・未来の時も表していると思った。
- ・ルントーのことを象徴しているから。ルントーは昔、丸くてつやつやしていた。「金色の丸い月」は2回出てきて、2回目は希望を表している。この文章では暗い気持ちを「四角」、楽しい嬉しい気持ちを「丸」で象徴しているらしい。
- ・この「金色の丸い月」は主人公に希望が生まれる時や、ポジティブな時に出てくる。また「四角な空」との対比になっていることから、いろいろな意味が込められている言葉だから。

のように、作品全体を概観し、複数の観点から意味づけした解釈へと変わっていった。特に、それぞれのキーワードの解釈が個別に深められていくのではなく、3つが互いに関連しあった解釈へと変わっていったことに伴って、作品全体を貫く読みが深まっていったことは大変興味深い。

上記のことから、作品をより深く読むためにキーワードを絞っていくという課題が、結果的に作品の重要なカギを握る表現へと生徒を誘ったと言えよう。例えば前述の「すいか」などは、指導者の解釈を上回るほどだった。この言葉を取り上げた生徒は、当初からここまでの解釈ができていたわけではなかっただろうが、これも交流の成果なのだろう。また、キーワードを絞るとしたことで、単に言葉の解釈が深まるだけでなく、作品の主題を考えることにもつながった。本来、表現と内容とは表裏一体で、区別しがたいものであるが、表現の仕方を評価することに重点をおいた単元においても、内容に迫ることができることを再確認した実践になった。

その一方で、キーワードを絞るという方向性が、作品中の多くの表現を切り捨てていく作業になったことは否めない。冒頭にも述べたように、『故郷』には優れた描写や象徴表現が多用されている。その多くが3つのキーワードという制限の中で、見過ごされていった可能性は高い。Ⅲの段階で、最終的に各個人で再解釈を行ったのだが、ほとんどの生徒が、Ⅱのグループでの話し合いの段階で出されていたキーワードの再解釈に終始した点は、今後の課題となった。

5 おわりに

本単元では、作品中に散見される描写や象徴表現を解釈させたいと考え、「作品をより深く読むための3つのキーワード」を探させる課題を与えた。独りよがりな解釈にならないよう交流の場面を仕組んだことは、より深くそして信頼性のある解釈を作る上で、効果があったといえる。

この実践では、解釈の交流がポイントになることは、当初からおおよそ予想できたことではあった。しかし、その交流の結果、生徒の読みがどのように変容していくのかはリアルタイムの生徒の反応に委ねる部分が大きく、不安があったのも事実である。

ただ、生徒の反応が、単発的な解釈の発表にならなかったのは、キーワードを絞り込むことを目的としていたことが大きかった。キーワードを絞り込むという作業が結果的に作品の主題に迫らせるこ

とになったのだ。キーワードの絞り込みが、これほどの産物を生むとは、当初は予想すらしていなかった。まさに、この授業リフレクションがねらいとする、指導者の予想を超えた「学び」である。と同時に、解釈という難度の高い課題をやり通すだけの素地を、本学級の生徒達が備えていた点も大きかった。3年間を見通したカリキュラムいかに重要であるかを改めて実感した実践にもなった。

本実践を参観いただいた方からは、最後にもう一度作品を読み返すというプロセスを取り入れることをアドバイスいただいた。ありがたいことである。

【参考文献】

秋田喜代美, 藤江康彦 「はじめての質的研究法—教育・学習編」 東京図書 2007.